

8月3日(水) ディレクトフォース

東京に着くとすぐ、笹川平和財団の国際会議場で行われました。初めに笹川平和財団理事長の田中氏より基調講演をいただき、その後グループセッションという流れでした。

基調講演では、田中氏が以前事務局長を務められていた国際エネルギー機関でのお話を中心に、世界を視野に働くことについての講演をいただきました。私は国際機関で働くという選択肢すら頭になかったので、お話のスケールの大きさに圧倒されました。一番印象的だったのは、「国際機関は時に国の政治を変える」という言葉です。その責任の大きさは、計り知れないものだと思います。世界を相手に働くには、強い精神と揺るがない決断力が重要であることが分かりました。

続くグループセッションでは、4人の方とお話しさせていただきました。第1クールは中村修子さんのお話でした。中村さんは実に色々なことに挑戦なさっている方で、なぜそんなに果敢に新しいステージに挑めるのかお聞きしたいと思っていました。私は小さい頃からチャレンジすることが苦手で、失敗しないようにばかりしていたからです。中村さんは、「楽しそうだと感じたらやってみていた。新しいフィールドに行くときは清水の舞台から飛び降りるような心地だった。」とおっしゃっていました。他にも、「新しいフィールドにいくたび、経験値が上がる。」「道は色々あるから、その時目の前にあったことに一生懸命取り組めば良い。」という人生の教訓をいただきました。次の第2クールは遠藤恭一さんのお話でした。遠藤さんは多くの異文化体験の中で、日本という国の特殊さや人間の「生きようとする力強さ」を感じてこられたそうです。限られた空間では自分の将来は決められない、というお話では、「外国には必ず行くべき。特に途上国に行くと人生観が変わる。」ということでした。日本から出たことのない私にはとても刺激的な言葉で、学生のうちに外国に行きたいと思いました。「発言しない人は国際的に通用しない。」「リスクを取らないリスクの方が大きい。」といったお言葉に内心反省したところもありましたが、「安全なところにいる自信はつかない。うんと失敗しよう。」とのアドバイスに励まさせていただきました。次の第3クールでは富永夏子さんとお話ししました。富永さんは、主に海外でハンセン病の方の写真を撮っていらっしゃいます。写真は相手に信頼してもらわないと撮らせてもらうことができないので、常に気配りを大切にしているとおっしゃっていました。また、ハンセン病の差別について、「もとは勘違いから始まったこと。集団の意見にながされず、待ったを掛けられる人が増えてほしい。」と話してくださいました。最後の第4クールは、長崎文康さんのお話でした。会社の顧問や中央労働委員会の委員をなさっていることもあり、働くことについてのお話を中心でした。「職場は自分を育てる場所。生きがいのある人生を作ってくれる。」と聞いて、働くことへの意欲が湧きました。

全体を通して共通していたメッセージは、「失敗を恐れず、好きなことややりたいことに

全力で取り組み」というものだったと感じました。色々なお話を聞かせていただく中で考えたこと、学んだことを忘れず、将来に生かしていきたいです。

8月12日（金） 企業大学訪問〈順天堂大学天野教授・仙台厚生病院〉

私たちの班は、天野教授が手術のため仙台厚生病院にいらっしゃったのに合わせて訪問させていただきました。仙台厚生病院の方々が色々と準備をしてくださり、天野教授とのお話の他にも、医局や病理科の見学、仙台二高 OB で仙台厚生病院医師の池田先生とのお話をさせていただきました。

私たちが仙台厚生病院に集合したときには、まだ天野教授の手術が終わっていなかったため、まず初めに医局や病理科を見学しました。医局には、たくさんの医療関連の本が並んでいる本棚や先生方の机、カウンセリングスペースなどがありました。私たちが見せていただいたのは一部でしたが、医局は科ごとにブースが分かれていて、話し合いなどがしやすくなっているそうです。本棚に並んでいる本の中には英語のものもあり、これからは英語にもっと力を入れなくてはならないと改めて痛感しました。病理科では、胃がんにより摘出した胃、脾臓、奇形腫により摘出した肺、卵巣嚢腫、子宮筋腫などを見させていただきました。ものによっては触らせていただくこともできました。人の内臓を生で見たのは初めてだったので、構造など新しく知ったところも多く、とても勉強になりました。予想外だったのは、癌と正常細胞の違いが私のような素人でも分かるほど明白だったことです。実際に見て触ってみなければこのようなことは分からなかったもので、大変貴重な体験でした。

見学を終えて、手術室の隣の部屋で手術の様子を映したビデオを見てみると、天野教授がいらっしゃいました。時間が無いとのことで、急遽その部屋でお話することになりました。天野教授は天皇陛下の冠動脈バイパス手術を執刀したことで有名な心臓外科医です。雲の上の存在が急に目の前に現れて、しばらく現実味がありませんでした。そんななかでも印象に残っていることを2つ書き留めたいと思います。1つ目は、天野教授の「人の死の方には大きく分けて2種類ある。満足げに笑って亡くなる人と、もう少し時間があればと無念のうちに亡くなるひと。後者になる覚悟がなければ、医者になってはいけない。」という言葉です。とても考えさせられる、重い言葉でした。医者になるならば、そのぐらいの自己犠牲ができればいけないのだと思いました。医師として生きるのか別の道に進むのか。これは、一朝一夕には決められないし、決めてはいけないと思います。これからの生活の中できちんと悩み、後悔のない決断を出したいです。2つ目は、「手術のときは緊張しないのですか。」という質問に対して、天野教授が「大きな手術は設備が良い病院でできるからワクワクして行く。」と答えられたことです。私だったら絶対に緊張するので、驚きました。しかし答えの続きを聞くと、納得の理由がありました。天野教授も、若い頃は緊張もしたし失敗もしたそうです。でも、何度も何度も同じ手術を経験していくうちに、うまくいかないことはあっても失敗（手術室で人を死なせること）はなくなり、自信がっ

いたということでした。「君たちだって試験で名前を書き忘れないだろう？」と天野教授。天才的な手術も若い頃の努力で成り立っているという、励みになるお話でした。

天野教授とのお話が終わり、会議室に戻って池田先生とお話ししました。池田先生は国境なき医師団に参加なさっていて、それについての色々なことを教えてくださいました。私は国境なき医師団がいつも危険にさらされながら活動していると思っていたのですが、安全が確保されているところでしか活動できないのでそんなことはないそうです。ただし、紛争地域で活動している以上、病院の隣の建物が爆破されたり、病院の窓に流れ弾が飛んできたりすることはあるということでした。どうも、直接攻撃を受けないようにするという意味の「安全確保」であるようで、大変なお仕事であることは間違いないようです。そんな環境の中でも冷静に人々を救う池田先生は素晴らしいと思いました。

今回の訪問で、2人の医師のお話を聞き、病院の見学までさせていただきました。一生に一度あるかないかというくらいの経験でした。この経験をさせていただいたことへの感謝を忘れず、自分の将来について真剣に考えていきたいです。